

俳句の神様と言われたのが、松尾芭蕉でございます。芭蕉は弟子の曾良と共に東北地方を旅して呼んだ句で読むとこの赤倉の地にも訪れて、句を呼んでいます。

仙台から山形へ、尿前の席を通過して、山越えをする。芭蕉たちがここで、村人に宿を借ります。それが今赤倉に残る、ほうじんの家とされています。

大雨の為、ここへ二泊した芭蕉が呼んだ句が、

「のみしらみうまのばりするまくらもの」

バリとはおしつこのことですが、これはのみやしらみにせめられて、馬の小便する音が枕もとに響く、とんでもないところに来ちゃったと。悪く解釈する見方もありますが、もしもこれが、村人達の好意の結果だとしたら、

村「おい、聴いたか芭蕉がここへくるんだとよ」

村「きんげんてい」

村「そのぼしようじやねえ。落語ファンしかわからねえこというんでねえ。俳句の芭蕉だよ」

村「あの俳句の神様の芭蕉先生がこんなところに来るのか」

村「そうだよ。今こつちに向かつてるらしい。峠を超えたら必ずこの集落を通るぞ、もし、宿を探していたら泊めてやんなくちやなんねえ。ほんでもしかしたら、ウチで歌も呼んでもらえるかもよ。」

村「こんななんもないところでか。」

村「ほら、松島で呼んだ句があっぺ。松島や、ああ松島や、松島や。あの俳句の先生があまりの美しさに感想してあの俳句の神様が季語を入れ忘れたという、あの句で松島の美しさが世に知れ渡った」

村「そんなの誰でも読めるべ」

村「なに言ってるんだ。おめえくが読んだら、なんだそれってなるけど、芭蕉先生がよむから、いいんだっぺ。芭蕉先生に読まれたら一流だそお。ウチでも読んでもらうべ」

村「赤倉や、ああ赤倉や、赤倉や」

村「同じでねえくか、もつとウチにはウチのやり方があるべ。おもてなしすれば、いい句を読んでもらえるべ」

村「おもてなしってどんな」

村「まず、いい環境作りだ。芭蕉先生はきつと古いものが好きだ、新しいものじゃなく、うんと古い古風なウチをかすんだよ。」

村「古くていいのか。」

村「いいんだ。返って新しいんだと気をつかわしうから、これぞ田舎というあえて古いやつでいくだ。でな、先生はお酒が好きときいてるからよ。ほれ、こないだ作った地酒、ほれ、「山と水と、」あれ出すべ。」

村「ああ山と水とな」

村「違うべ、山と水と、 点が入るべ、だから、山と水と、な」

村「山と水とだべ。」

村「だから、山と水と、、だ！このいっばくが重要なんだ」

村「それ、どっちでもええが」

村「それ、どっちでもええっていったら、加奈子ちゃん怒るぞ、でこの赤倉の水で作った酒を飲ませれば、いい句が浮かぶべ、あとな、この地域の人は馬を大事にするところを見せるべ、先生は自然や動物が好きだつてからあ。外に馬をつないどけ。さあぐつぐつしてると来ちまうぞさっそく支度だ」

この村人達が芭蕉をもてなすために、村で一番古い民家を宿にして、樽になみなみと酒を入れて起きます。樽を外においておいたのですが、このふたを閉め忘れておりまして、さあく芭蕉と曾良がやってくる。

芭「すいません。こちらに今晚とめてもらいませんか？」

さあ〜待ってました芭蕉先生と用意しておいた。古民家に案内する。夜になりました

芭「空、ここの人達はすぐ優しくしてくれるな。良い人地たちで気に入った。」  
そ「そうですねえ。私も（虫歯のくだり）」

芭「では、私はそろそろ寝るとする」

かゆい、かぐしぐさ。

起き上がって、

芭「かゆい、かゆい、かゆすぎる、のみかしらみか」  
かゆすぎて、寝てられん。しなびた雰囲気は好きだが、さすがにかゆすぎて寝てられん。

ん、なんだ表の音は、ジョージョーって聞こえるな。誰かの小便かあ。なんか、ヒックヒックジャージャー  
駄目だ、とれもうるさくて寝てられん。  
止まらないなあ〜この小便。

痒いし、うるさいし、

あつそうだ、そうだ、村人がわしの用意してくれた、酒を用意してくれたなあ。酒でも飲んでないと寝られん。

ああ〜。馬が、馬が、全部飲んでしまったのか！！  
ヒックじよ〜！ヒックじよ〜。

こうなったら仕方ない、村人に言って別の場所に泊めてもらおう。  
あつ何だ、明かりがまったくないぞお〜。真つ暗だあ。明かりもついていない。

のみ、シラミ、馬はバリするし、真つ暗だ、何なんだ！！

真つ暗元なんだあ。

ここで読んだ句が、、【蚤虱馬のばりする枕元】

信じるか信じないかは貴方次第！！